

「地域にねざした災害安全意識向上の取組

～地域とともに行動できる主体性の育成～

令和3年度 高知県学校安全総合支援事業（災害安全）

高知県教育委員会 拠点校 高知県立嶺北高等学校

1 拠点校の取組

(1) 拠点校の目標

【現状の課題】

本事業の拠点校である嶺北高等学校は、四国の中央に位置する嶺北地域で唯一の県立高等学校である。平成13年度から連携型中高一貫教育校となり、現在は、隣接する土佐町の土佐町中学校と、本校が立地する本山町の嶺北中学校（同居）の2校と連携している。また、本校が立地する地域は、中山間地域であり、南海トラフ地震による津波被害はないが、土砂崩れやライフラインの断絶など、地震に対する防災・減災などの取組は必須であるとともに、本校は周辺地域の避難所になっていることもあり、地域と一体となった防災教育の推進が求められている。

【目標】

拠点校の重点的な取組としては、校内防災教育推進委員会の開催や研修会の実施、先進県への視察を生かした事前事後交流、「総合的な探究の時間（嶺北探究）」を中心とした教科・領域での探究的な防災学習、本校が避難所として有効に機能するためのHUGや地域住民との協議を重ねた避難所運営の在り方に関する検討会、活動内容を発表するファイナル・レポート発表会などを通して、生徒が防災に対して主体的に取り組む姿勢や態度、資質・能力の育成を目指す。

拠点校を中心とするモデル地域としては、各校の学校安全担当教員が、実践委員会等で拠点校の取組の共有を図り、各校での取組に生かしていくとともに、保小中高の連携の中で、一貫した体系的な防災教育の取組についても検討していく。研修会についても、学校防災アドバイザーによる避難訓練の実施について、多様な設定や中高合同で実施するなど拡充を図る。さらに、保護者や地域住民も巻き込んだ講演会やHUGの実施などを通して、参画型の防災教育・啓発に努める。

このような取組を通して、本校の防災教育体制の拡充や、学校安全担当教員を中心とした教職員の防災意識やスキル、態度など、その資質・能力・対応力の向上を図る。

また、拠点校やモデル地域での取組の集大成となる成果発表会や、研究成果を取りまとめたパンフレット等を活用して、事業実施後も拠点校及びモデル地域の取組について、本山町連携教育事業を生かし、検証する機会も設けながら、継続的な防災教育を実施していく。

(2) 安全教育の充実に関する取組

①実践的な防災訓練の実施

ア. 第1回防災訓練（新入生を迎えての中高合同避難訓練）

4月28日（水）、ホームマッチ前の1・2時間目を利用し、新入生を迎え本年度初めての「中高合同防災・避難訓練」を実施した。南海トラフ地震を想定し震動中の安全確保、地震発生時の避難場所としている体育館への一斉避難、避難経路確認および集合方法などを主な訓練内容とした。今回の避難時間は7分であった。避難行動を一斉に行うというオーソドックスな避難訓練でもあり、全体として適切な避難行動ができた。来年度以降はもっと実践的な内容を検討したい。

イ. 第2回防災訓練

9月1日(水)、想定される南海トラフ地震に備え、学校内で火災・震災等の非常事態が発生した場合に、迅速かつ安全な避難等ができる訓練を実施することにより、防火防災意識の高揚をはかり、地震等による人命及び財産の損失防止を目的として防災訓練を実施した。今回は、校内推進委員会での高知大学岡村 眞教授のアドバイスを生かし、体育館避難を中止し、教室での避難訓練とした。また、終了後引き続いて岡村教授による講演をオンライン等で受講し、生徒および教職員の意識高揚も目的とした。



ウ. 中高合同防災講演(人権講話)

10月21日(木)、人権教育講演会として、高知大学地域協働学部准教授の大槻 知史先生による「災害時における人権侵害について」をテーマに講演していただいた。災害時には女性や子供といった弱者に対するしわ寄せが起きやすく、避難所運営等を考える場合は、そうした人たちへの配慮を忘れないことが大切であるということに気づくことができた。

<感想>

- ・災害が恐ろしいのと同じくらい、避難生活での精神の衛生が害されていくことも危ないと思った。できるだけ、全体の意見を汲んで避難を続けるには一人ではなく全体が考え、力を合わせる必要がある
- ・女性が着替えるところがないのは初めて知った。着替えるところや着替えるものは、あるとばかり思っていたので驚いた。
- ・周りの大人や友達を巻きこんで、避難生活が少しでも楽になり、うまく運営できるように今から周りの人と相談しておくことや避難生活で現れてくるデメリットなどを今から少しでもリストアップしておくなどできることをやりたい。
- ・避難所で小麦アレルギーであってもパンを食べさせたという行為に少し火が付きました。確かに生きるためには「食べる」しかない。でもそういう子どもに食べさせて死んでしまったらどうなるのか。

エ. 第3回防災訓練

11月4日(木)、第2回と同様、南海トラフ地震に備え、学校内で火災・震災等の非常事態が発生した場合に備えて、防火防災意識の高揚をはかるため第3回避難訓練と、それに引き続き防災講演を実施した。また、今回も高知大学の岡村教授の助言に従い、避難場所を体育館ではなく、全員が4Fへ避難することとした。また、これに引き続き、宮城県石巻市出身で自身も東日本大震災の被災者である四万十町危機管理課の中野 未歩氏による講演をオンラインで行った。災害を機に、自己の生きる目的を知り、その後のキャリアを考える貴重なきっかけとなったという中野氏の講演は、災害の発生にかかわらず主体的に人生を選択する行動の大切さに気付くことができる非常に有意義なものであった。

②防災の授業等

ア. 防災グループによる探究学習(嶺北探究)

- ・先進校とのオンライン交流(宮城県気仙沼向洋高等学校)

遠隔通信システムを利用し、上記高校の生徒および教員と意見交換を2回実施した。1回目は互いの活動報告とそれに関連する質疑、2回目は本校の防災グループが11月に参加する高知県高校生津波サミットに向けたアクションシートに関する意見交換を主に行った。本来なら、8月末に実際に現地を訪問し、交流を深める予定であったが、コロナ感染者の増加により惜しくも中止となった。ただ、その後、向洋高校の担当教員が、本校生徒たちの研究テーマである「災害時の逃げ遅れ」に関する講演資料を送ってくれ、生徒たちの逃げ遅れに関する深い視座を得ることができた。

・高知県内フィールドワークおよび高知県高校生津波サミットへの参加

上記防災グループの生徒たちが、県内でのフィールドワークに参加し、各地に残る津波災害の記憶について学習した。その多くは沿岸部近くに位置しているため、嶺北地域とは環境が異なるものの、生徒たちは、先人たちからの言葉を知り、一層防災学習への意欲を高めた。その2週間後、オンラインによる高知県高校生津波サミットに参加し、同年代との交流や体験者による講演により一層刺激を受けた様子であった。また、自分たちの活動の発表に関する高知大学の原先生からの適切なアドバイスをいただき、さらに防災学習を深化させようとする気持ちにつながった。



・発表会

探究学習における防災グループの生徒たちが、2年生の学年発表会で自分たちの取り組みを発表し、学年全体で共有した。惜しくも上位チームに選ばれず、1・2年生全体の発表会（マイプロ発表会）で研究成果を発表することはできなかったが、2月に行われた第2回実践委員会にて地域委員の方々に成果を発表した。



イ. 防災学習（保健）

教科名	保健
実施日時	令和3年6月～令和4年2月
授業者	山本 裕之、本田 貴久
対象生徒	1、2年生
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・安心、安全な生活をおくるためには安全な環境づくりや自己の適切な役割を判断し行動できることが重要である。 保健の授業を通して各単元の内容を防災に関連づけながら授業を進め、様々な災害を想定したなかで安心、安全な環境づくりとはどのようなものかを考えさせ防災意識を高める。
身に付けさせたい力	<ul style="list-style-type: none"> ・防災に対する基礎的な知識の定着。 ・災害時における様々な危険を予測し回避できるようになる。 ・災害時における自己の役割を考え行動できるようになる。
実施内容	<p>1、現代社会と健康</p> <p>(1)食事と健康</p> <ul style="list-style-type: none"> ・非常食を調べてみよう。 <p>(2)感染症とその予防</p> <ul style="list-style-type: none"> ・避難所における感染症対策を考えてみよう。 <p>(3)心身の相関とストレス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然災害による PTSD について。 <p>(4)交通事故の現状と要因</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然災害などによる障害の防止や自他の生命の尊重。 <p>(5)日常的な応急手当</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害発生時に起こりうる応急手当の必要性を考えよう。 <p>2、生涯に通じる健康</p> <p>(1)さまざまな保健活動や対策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害時における様々な保健活動を理解しよう。 <p>3、社会生活と健康</p>

	(1)働く人の健康づくり ・自然災害と労災について。
他の行事・事業との関連	・これまで実施してきた避難訓練や防災講演などの内容を交え、既習している防災の基礎的な知識を整理し授業を進めていった。
まとめ	・保健の授業で通常扱う内容に関連づけた内容として防災教育を行ったことで、自己の課題や問題点がより明確になるなど様々な視点から防災について考える機会になった。 また、環境づくりを考えるにあたりエビデンスを示しながら理解をうながしたことで、振り返りの際の発言や文言にもより具体的な例が示されるなどより理解を深めることができたと考える。

③安全管理の充実に関する取組

・地域内アンケートの実施

探究活動の一環として、本山町役場にお願ひし、住民アンケートを行った。そのなかで明らかになった避難意識に関する年齢による強弱や災害に関する地域特性をいかした注意喚起ポスターを作成した。作成後は町役場にお願ひし、地域内の各所に掲示してもらうようにした。

・危機管理マニュアルの改善

第1回実践委員会において、高知大学の岡村教授から、地盤やダムなどの嶺北地域に特有の条件を加味したもので、なおかつ時系列で対策がわかるような災害本番をイメージした危機管理マニュアルの作成が必要であるとの指摘を受け、マニュアルの簡易版を作成した。

・生徒自らが本山町の危機管理担当者と協働しながら、地域の老人を対象に防災意識へのアンケートを行い、自らの探究活動にいかすとともに、注意啓発を目的とした防災ポスターを作成した。

2 成果と課題

新型コロナウイルス感染症の影響で、校外との連携がほとんどできなかったため当初の目的である拠点校としての役割を果たすことはできていない。また、県外先進校視察についてもオンライン交流のみにとどまっており、津波災害の現場で身をもって体感する経験が少ないため、課題探究グループの生徒たちに災害をより自分事化させることができていない。ただ、嶺北中学校・高校内では避難訓練やその後の講演会等をとおして、下記に述べるように生徒及び教職員の意識に若干ではあるが肯定的な変化もみられる。

3 今後の取組

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響でモデル地域全体への防災教育への推進体制を構築できなかったため、来年度は地域全体で防災教育に取り組み、より充実した指導方法を地域内で実践したい。

また、校内においても防災グループの探究学習で得られた成果を他の生徒や地域の小中学校とも共有し、課題の共有や連帯意識の向上につなげることで、本山町全体の防災意識向上に寄与したい。